Aydin Hamami

月明かりとともに

私たちは、静寂の中に身を置くとき、しばしば月明かりに寄り添われていることに気づきます。夜の曲がりくねった道を歩くとき、真夜中に車を走らせて家路につくとき、幼い頃の記憶の中で、計り知れない星々を見上げるとき、そして夢の中で。

夢の中で、私たちは再び自分自身と向き合います。希望や恐れ、記憶、後悔、そして失ってしまった愛しい人たちのもとへと戻っていくのです。月明かりに寄り添われながら、私たちは自分自身に真実をさらけ出します。それは生々しく、傷つきやすく、何ひとつ飾られていない姿です。
本展に並ぶ作品もまた、そうした脆さから生まれています。それらは、親密さや身体性、そして触れるという感覚を宿したオブジェであり、私たちをさらに自分自身の内側へと引き込んでいきます。柔らかさと影をまとったそれらは、私たち自身や記憶と同じように、儚さと崩壊の境界に存在しています。

私たちが記憶へと立ち戻るとき、そこには以前よりも鮮明な視点があり、しばしば新たな見方が生まれています。しかしその一方で、私たちは判断や批判を伴いながら、過去を振り返ることもあります。自分自身の過去を、偏りのない目で評価することはできません。かつて確かに起こった出来事も、罪悪感や郷愁、そして喪失の苦みによって、曇らされてしまうことがあります。
思い出すたびに、何かが変化していきます。かつて確かだと思っていた細部は曖昧になり、やがて消えてしまうこともあります。一方で、別の記憶は誇張され、実際に起きたことと、私たちが記憶していることとの隔たりは、ますます不確かなものになっていきます。
その曖昧さの中にこそ、私の作品が存在する場所があります。